

スコットランド西部アイオナ島の歴史と巡礼ツーリズムの素描

Pilgrimage and Spiritual Tourism in Isle of Iona, Scotland

橘 セ ツ

キーワード：アイオナ島、聖地、巡礼ツーリズム

要 旨

18世紀の英国において活躍した文人サミュエル・ジョンソンは、友人のジェイムズ・ボスウェルとともに1773年10月スコットランドのインナー・ヘブリディーズ諸島のアイオナ島を訪れて「マラトンの平原に立って国を念う心が高揚しない輩、あるいはまた、アイオナ島の廃墟にたたずんで神を敬う心がさらに熱くならない輩は羨むに足らない」と記した。本稿では、アイオナ島の歴史と巡礼ツーリズムについて素描した。アイオナ島のキリスト教の聖地性には、4つの時代があった。アイルランド人聖コロンバ（521-597：ラテン語でコロンバ Columba、ゲール語・アイルランド語でコルムキル Columcille）の563年のアイオナ島到着からはじまる初期キリスト教修道院共同体の時代、中世のベネディクト派修道院・オーガスティン派尼僧院時代、修道院解散法によって廃墟化する修道院遺跡の時代、修道院の修復・復興をとまなう20世紀の超宗派のアイオナ・コミュニティの時代。本稿では近代の紀行文・ガイドブックに記されるアイオナの呼称について検証しながら、近代ツーリズムにおけるアイオナとケルトの再発見について考察した。

I. はじめに：インナー・ヘブリディーズ諸島の聖地アイオナ島

「私たちはついにかつてのカレドニア地方の聖地、未開な氏族と流浪の野蛮人たちが知識の恩恵と宗教の祝福を得たかの高名なる島を足下にした。場所の与えるすべての感動から心を切り離すことはいくらしようと努めても不可能であり、たとえ出来たとしても愚かなことであろう。我々を感覚の支配から引き離してくれるものは何であれ、すなわち、過去、遠隔の地、または未来をして現在を支配させるものが何であれ、物思う人間の尊厳を高めてくれる。知恵、勇気、あるいは美徳によって神聖化された土地の上を無関心かつ無感動に歩かせるような学問とは私も私の友人たちも無縁であれ。マラトンの平原に立って国を念う心が高揚しない輩、あるいはまた、アイオナ島の廃墟にたたずんで神を敬う心がさらに熱くならない輩は羨むに足らない。」(ジョンソン, 2006:209)

18世紀の英国において活躍した文人サミュエル・ジョンソンは、友人のジェイムズ・ボスウェルとともに1773年スコットランドを旅して紀行文『スコットランド西方諸島の旅』を著した。



図1 アイオナ島の位置
 (出典：Power, Rosemary. (2013) *The Story of Iona*. Canterbury Press. Norwich. p.xi.)

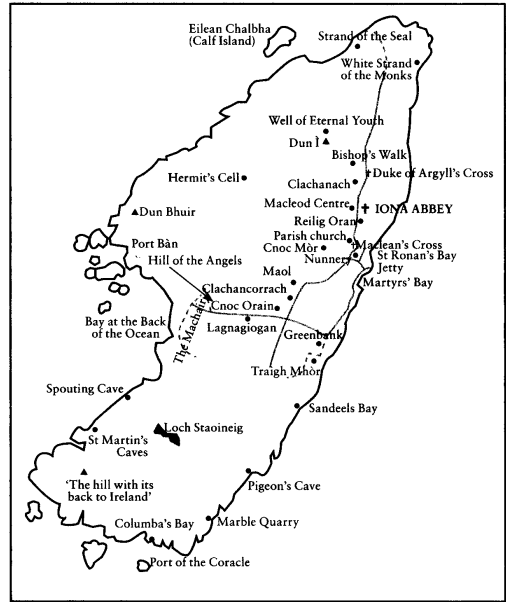


図2 アイオナ島
 (出典：Power, Rosemary. (2013) *The Story of Iona*. Canterbury Press. Norwich. p.x.)

かれらは10月に、当時はイーコ
 ルムキル島と呼ばれていたアイ
 オナ島を訪れた。アイオナ島
 は、スコットランド西部イン
 ナー・ヘブリディーズ諸島に属
 し、スコットランド本土西端の
 港町オーバン (Oban) から西沖
 のマル島 (Isle of Mull) の西さ
 らに約1.6km先に位置する。ア
 イオナ島は、東西の一番長い幅
 は2.5km、南北の長さ5.5kmの小
 島であり、現在の人口は125人
 である (2012)。



図3 アイオナ島の船つき場 Jetty に近づくフェリーから見
 たアイオナ修道院 (2011年筆者撮影)

ジョンソンによるこの賛辞は、当時一般にイーコルムキル島と呼ばれていた島のことを、古
 名であるアイオナと呼び、ほめたたえた言葉として現在でもガイドブックなどによく引用され

る。

この島が、千数百年にわたり聖地だとされ巡礼の対象となっているのは、アイルランドのイー・ネール王族の家系に生まれた聖職者にして政治家のコロンバ（521-597：ラテン語でコロンバ Columba、ゲール語・アイルランド語でコルムキル Columcille、後に聖人に叙せられ聖コロンバと呼ばれる）が故郷アイルランドをはなれ、12人



図4 聖コロンバが563年に到着したと伝えられるアイオナ島南端の Columba's Bay（2012年筆者撮影）

の仲間とともに、西暦563年の聖霊降臨日にこの島に上陸し、初期キリスト教修道院共同体を創設したという故事にはじまる。イーコルムキルとは、ゲール語・アイルランド語では「コルムキルの島」、つまりラテン語名「コロンバの島」という意味である。アイオナ島について述べているあらゆる書物は、この聖人コロンバのエピソードが必ずはじめに語られている。

アイルランドのキリスト教受容史を研究している盛節子によると、アイルランドにおける初期キリスト教の霊性に一貫して流れ、その中心テーマをなしているものは、救いを根本原理とするキリストのための巡礼と殉教であるという。伝統的霊性を最も象徴的に示しているのは、巡礼と殉教の精神を、異郷の地におもむく「贖罪巡礼」(Exile)を通して体現した修道者の生き方である。アイルランドの修道士の「贖罪巡礼」は、西暦563年、アイオナ島に共同体を構えたコロンバに端を発する（盛，1991：129）。愛着のある故郷をはなれ異郷の地を拠点にキリスト教布教に一生を捧げたコロンバの生き方をさして「白の殉教」と呼ばれることとなった。一方、血を流すような殉教を「赤の殉教」、アイルランドにキリスト教を伝えた聖パトリックの行いのように土着の神々を吸収しながら血を流さずに行った布教を「緑の殉教」と呼び讃えている。

本稿では、アイオナ島における巡礼ツーリズムについて素描を試みる。Ⅱ章では、アイオナ島の歴史について今までどのように描かれて研究されてきたのか著作・資料を紹介する。Ⅲ章では、聖地巡礼ツーリズム研究の視点を紹介する。Ⅳ章では、近代の紀行文・ガイドブックに記されるアイオナの呼称について検証しながら、近代ツーリズムによるアイオナとケルトの再発見について考察する。Ⅴ章では、アイオナ研究の今後の課題についてまとめる。

Ⅱ. 著作・資料からみたアイオナ島の歴史

筆者がアイオナ島について理解するために参照した文献は、本稿の参考文献リストに示した。Ⅱ章では、それらの文献から、アイオナ島の歴史とその聖地性について、どの時代に、どのよ

うな個人や集団によって書かれたのかというヒストリオグラフィーの視点を考慮し考察する。

アイオナ島の公式ガイドブック *Iona Abbey and Nunnery: the Official Souvenir Guide* は、スコットランドの歴史的建造物などの史跡保全団体であるヒストリック・スコットランド (Historic Scotland) が刊行している。著者は、Anna Ritchie と Ian Fisher であり、2001年に初版、さらに増補版が2011年に刊行されている。このガイドブックは、アイオナ修道院の売店で購入することができ、アイオナ島を巡礼・探訪するツーリストにとっての必携のガイドブックである。このガイドブックの冒頭には、本稿のはじめに掲げたサミュエル・ジョンソンの言葉が引用されている。ガイドブックでは、聖コロンバの遺産からはじまる初期キリスト教、中世修道院のキリスト教の遺跡・遺産をくまなく案内することを目的としているが、次のようにその遺産が現在にどのように生かされているのかについての視点を巡礼者に示している。

The visitor sees the abbey restored and alive. That this is so is a tribute to the many people who in recent times have not revered its ancient sanctity but also believed it had a vital role to play in our modern world, as a place for calm and quiet reflection (Ritchie and Fisher, 2011: 4)

このことは、アイオナ修道院の歴史と廃墟となっていた遺跡を20世紀によりみがえらせた修復の過程について知るとより理解することができる。

以下は、アイオナ島の歴史を文献によって概観する。アイオナ島が巡礼の対象となったキリスト教遺跡・遺産の展開は次の4つの時代にわけられる：1) 西暦563年の聖コロンバ到着にはじまる初期キリスト教共同体の時代からヴァイキング襲撃による終焉まで、2) 1203年のベネディクト派の修道院創設からヘンリー8世が行った修道院の解散法 (1539) まで、3) 廃墟化する修道院遺跡の時代、4) 20世紀にはじまるキリスト教の宗派を超えて活動するアイオナ・コミュニティを中心とした修道院の建造物の修復・復興の時代 (1938年から現在)。この章では、それぞれの4つの時代の展開について順を追って簡潔に紹介する。

1) 563年聖コロンバの到着にはじまる初期キリスト教共同体の時代からヴァイキング襲撃による終焉まで

コロンバは、当時この地域を治めていたダルリアダ国王からアイオナ島を寄進され、コロンバと弟子たちは、ここに修道院共同体を創設し、島を開拓し自給自足の生活を行った。ダルリアダ国王は、アイルランドにルーツを持つ。修道院では、修道院長のもとで修道士たちは祈り、耕作などの労働、聖書・典礼書などの写本制作を通じてキリスト教研究・教育の日々を送り、外部からは巡礼者や客人の滞在を受け入れた。574年には、コロンバはダルリアダ新国王の接手を行い、王権との関係を深めた。このように、アイオナ島はダルリアダ王国のキリスト教の中心地として栄え、アイルランドと北ブリタニアの交流の中心の役割を果たした。スコット人、

ピクト人、アイルランド人、ブリトン人、アングロ・サクソン人なども、疲れを知らないコロ
ンバの名声にひかれて訪れた。かれら訪問者や巡礼者の中にはそのままアイオナ島に住み着く
者も多かった。そこで、コロンバはアイオナ島の定員を150人と定め、その定員を越えたときに、
21人の修道士が新たな修道院を建てるために旅立ち、60の修道院が、コロンバが亡くなるまで
に各地にたてられた。コロンバの創設したアイオナ島の修道院共同体は、初代修道院長コロン
バが597年に亡くなってからも、歴代の修道院長は、コロンバと同じアイルランドのイー・ネー
ル王族の系譜をひく者たちが選ばれた。以上のことが記された『聖コロンバ伝』は、コロンバ
がアイオナ島で没した後百周年を記念し、697年に9代目アイオナ修道院長アダムナン
(Adomnan, 627/8-704) によって、それまでのコロンバの口伝や記録に基づいて聖人としての預
言・奇跡・幻視のエピソードとしてまとめられた (Sharpe, 1995)。

しかしながらアイオナの初期黄金時代は長くは続かなかった。802年以降アイオナは北方ス
カンジナビアのヴァイキングの襲撃を受け、806年について修道士68人がヴァイキングに殺害
され殉教した。そこで、アイオナの修道士たちは、修道院の活動拠点としてアイオナを安全な
土地とみなすことができなくなり、アイルランド中部ケルズに修道院をつくり (814年完成) そ
こに移動することとなった。現在は、アイルランドの首都ダブリンのトリニティ・カレッジに
展示されている福音書の美しい飾り文字の写本『ケルズの書』は、8世紀末ごろにアイオナ修
道院で制作されたとの説が伝えられている。この写本『ケルズの書』は、写本制作にも長けて
いたコロンバの没後二百年を記念して制作されたとも伝えられる (シムズ, 2008)。

2) 1203年のベネディクト派の修道院創設からヘンリー8世が行った修道院の解散法 (1539) まで

聖コロンバの修道院がアイルランドに拠点を移した後は、アイオナ島は荒廃していたが、
1203年にベネディクト派修道院が、コロンバの初期の修道院跡に建設され、アイオナ島は聖地
として再生された。これは、ヴァイキングの襲撃に対抗してスコットランド西部島嶼を治めた
島の王・サマーレッド (Sommerled, the Lords of the Isles) の招きによる。アイオナ島は、島の王・
サマーレッドをはじめアイルランド・北ブリタニア地方の島々を治める歴代の王族たちが埋葬
される土地となった。さらに、アイオナ島にはオーガスティン派の尼僧院も創設された。この
時代に、アイオナ修道院の建築物が建造された。この時代の終焉は、ヘンリー8世が行った修
道院の解散法 (1539) による。アイオナのベネディクト派修道院とオーガスティン派尼僧院は
解散させられた。

3) 廃墟化する修道院遺跡の時代

ヘンリー8世が行った修道院の解散法 (1539) 以降、これらの修道院と尼僧院は、廃墟化す
る。アイオナ島は、スコットランド地主貴族アーガイル卿に所有される。島の住人は、地主か

ら直接土地を借りているクロフターと呼ばれる小規模の小作人である。かれらは、牧畜農耕を行い、海藻を燃やしてできる灰であるケルプを生産して生活する (MacArthur, 1990)。18世紀後半には冒頭に引用したサミュエル・ジョンソンとジェイムズ・ボスウェルがアイオナ島を訪れている。古代、中世ともにキリスト教の中心地であったアイオナ島は、かつての栄華をしのび、ロマンティックに廃墟を愛でるピクチャレスク趣味の対象となる。この時代に遺跡物を科学的な調査の対象ととらえる視点も新たに生まれる。19世紀には、蒸気船が発達すると西方諸島は近代ツーリズムの対象となる (Grenier, 2005)。アイオナ島とスタファ島などを目的地とするガイドブックが蒸気船で訪れる観光客のために刊行される。

フランスのSF小説家ジュール・ヴェルヌが、アイオナ島とスタファ島を舞台にした小説『緑の光線』を1882年に刊行する。女主人公のミス・キャンベルが太陽が沈むときにまれに現れる緑の光線

を見る事ができると幸せになるという言い伝えを信じて、グラスゴーから緑の光線を追求めて西方のヘブリディーズ諸島アイオナ島を訪れ、廃墟のアイオナ修道院を保護者であるふたりの叔父と、婿候補の対照的なふたりの若者と散策する。

ふたりの婿候補の若者のうちアリストビューラス・ウルシクロスは、科学的な視点一辺倒でアイオナ島を探求する。アイオナ島にて、マクリーンのケルト十字架の標柱を見れば、かれは標柱の土台の岩石を金づちで叩いて壊しサンプルとして花崗岩のかけらを採取する。ミス・キャンベルは「聖像破壊の時代はもう過ぎたのでは」とかれの行為をとがめるが、アリストビューラス・ウルシクロスは、地質学者としてどのようなものか知っておきたいとルーペを出してかけらを調べ「ひじょうにきめが細かくて、固い、赤色花崗岩だ。ノンヌ島から出たものにちがいない。」とコメントする。一方、もうひとりの婿候補オリヴァー・シンクレアは、マクリーンのケルト十字架の標柱やアイオナ修道院の廃墟をスケッチして芸術的にとらえようとする。図5はかれら5人がアイオナ修道院の廃墟の中を散策している場面だが、アリストビューラス・ウルシクロスは、修道院の大きさを測り、岩石を調べ、科学と考古学を語る。さらにミス・キャンベルが聖母子像を見た時にもらした感想「目が微笑しているようですわ！」に対して、アリストビューラス・ウルシクロスは、目が微笑しているのは「世間一般に広まっている

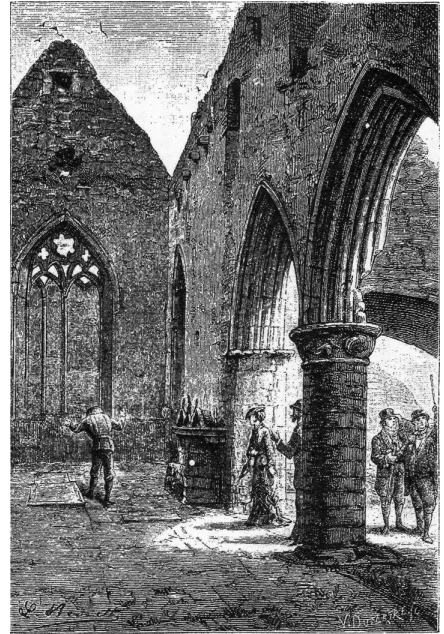


図5 廃墟化したアイオナ修道院を訪れる観光客たち一行
(出典：ジュール・ヴェルヌ (中村三郎訳) (2014, 原著は1882) 『緑の光線』 交遊社、179頁より)

誤謬」だとして目が微笑むことはありえないことを科学的に証明しようと試みる（ウェルズ，2014（原著は1882）：173-180）。作者のウェルズは、アリストビュラス・ウルシクロスを科学のみに偏った、つまらない冷たい人間として描き、ユーモラスに風刺している。緑の光線を追い求めるミス・キャンベルと幸せを分かち合えたのはオリヴァー・シンクレアであった。

4) 20世紀にはじまるアイオナ・コミュニティを中心とした修道院の修復・キリスト教コミュニティの復興の時代（1938年から）

20世紀初期から中世修道院廃墟の改修が着手される。超宗派（エキュメニカル）をめざすキリスト教の司祭ジョージ・マクラウド George MacLeod がリーダーとして設立したアイオナ・コミュニティが修道院の改修に

1938年からたずさわる。グラスゴーなどの大都市の貧困問題にキリスト者としてかかわっていたマクラウド司祭は、都市に居住する貧困状態の若者に技術を身につけさせ支援をすることをかねて、アイオナ島にてあらたなキリスト教コミュニティの実践をめざした。1950年にはアイオナ修道院の修復・修景が完成し、記念礼拝が行われた。

現在まで、アイオナ・コミュニティは、世界各地から訪れる巡礼者・ツーリストを長期・短期のさまざまなプログラムで受け入れ、修道院では、毎日、誰でも自由に参加できる礼拝（聖餐式）を行っている。現在、アイオナ修道院を見学するガイドツアーでは、ガイドは必ずはじめに次のことを述べる：「アイオナ修道院の建造物などの物質面はスコットランド地方政府の史跡保全団体であるヒストリッ



図6 墓地 Reilig Odhrain へと続く死者の道 Sraid nam Marbh 'street of the dead' からアイオナ修道院を望む（2011年筆者撮影）



図7 アイオナ島のオーガスティン派尼僧院の廃墟（2012年筆者撮影）

ク・スコットランドが管理を担当し、修道院での毎日の礼拝などのキリスト教の精神面の活動はアイオナ・コミュニティが運営するという連携が行われている」(筆者による2012年の聴き取り)。一方、20世紀に修復されたアイオナ修道院とは対照的に、オーガスティン派尼僧院の方は、廃墟をロマンティックに愛でる18世紀のピクチャレスク趣味を彷彿とさせ、廃墟の姿でヒストリック・スコットランドによって庭園のように管理されている。

現在から見ると1938年にマクラウド司祭によって創設されたアイオナ・コミュニティの初期の活動は、回顧する対象となっている。アイオナ・コミュニティでは、初期のコミュニティについて、様々な立場に関わった人々の言葉を伝え残そうというオーラル・ヒストリーを書く試みを続けている。Anne Muirによる *Outside the Safe Place: an oral history of the early years of the Iona Community* (2011) はその成果のうちのひとつである。さらにアイオナ・コミュニティにある Wild Goose Publishing という出版部門から、アイオナ島とキリスト教に関連する様々な著作を発信している。

キリスト教の急進的な社会運動にもともとのルーツをもつアイオナ・コミュニティは、現代社会の中で様々な文脈でとらえ直されている。現代社会の中で自然とのつながりを見直すときに意味を新たに見いだされるケルト・キリスト教、スピリチュアリティ、ニュー・エージの潮流など (Power, 2010; Nahmad, 2014)。宗教の私事化が進む中で、ヒーリングなどのスピリチュアルな癒しの文脈でもアイオナ島とアイオナ・コミュニティが重要な位置を占めて論じられている (Monteith, 2000)。

2013年は、聖コロンバ上陸1450周年であった。これを記念してアイオナについての著書があらたに2冊刊行された。Rosalind K. Marshallによる *Columba's Iona: A New History*. (2014) と Rosemary Power による *The Story of Iona*. (2013) である。

Ⅲ. アイオナ島と聖地巡礼ツーリズム研究の視点

『聖地巡礼ツーリズム』(2012)の編著山中弘によると、現代社会では「聖地を眼差す私たちの視線が変わってきている」と指摘する。多様な聖地とその眼差しについて、山中は現代聖地動態類型図で説明している。現代聖地動態類型図とは、横軸の右端「宗教的聖地」左端「非宗教的聖地」、縦軸の上端「信仰・慰霊・顕彰」、下端「ツーリズム・文化財」のどこかに聖地巡礼ツーリズムが位置する。

このような聖地動態類型図で考えると、アイオナ島の聖地巡礼ツーリズムは第1象限(横軸: 宗教的、縦軸: 信仰)に位置するキリスト教の伝統的な聖地である。しかしながら、近年、海を背景とする修道院の建物の美しさ、苔むしたケルト十字架の彫像のおごそかさや芸術的な雰囲気、スコットランド特有の北方の自然環境の多様さや風景の美しさ、さらにはアイオナ島の静謐な雰囲気やスピリチュアルな癒しの場所のイメージなどに惹かれるツーリストも来訪している(2011・2012年に筆者が行ったインタビューによる)。この聖地動態類型図で考えると、ア

アイオナ島をめぐる聖地巡礼は縦軸の信仰からツーリズム・文化財の方向へゆらぎつつあると考えられる。

山中弘によると、聖地をどのようにとらえるかについては、「聖なるもの」「場所」「人間（社会）の役割」の3つの要素のうちどれをより重視するかによって「実在論的アプローチ」「場所論的アプローチ」「構築主義的アプローチ」の3つに整理できる。ここでは、アイオナ島の聖地性についても、この3つの視点を考慮に入れて考察してみよう。

アイオナ島は聖コロンバの563年の到着以降、聖人コロンバの来歴がアイオナ島のいくつかの場所に刻まれて語られている。アダムナーンの『聖コロンバ伝』に語られるさまざまな場所が巡礼される聖地となっている。563年コロンバが到着したという浜 *Columba's Bay*、アイオナ修道院の中にあるコロンバ埋葬地と伝承される場所に建てられた小礼拝堂、コロンバが天使を集めて語り合ったとされる小高い丘の場所は *Hill of the Angels* という地名で示されている。アイオナ島以外にもキリスト教を布教した聖コロンバの来歴は及ぶ。スコットランドのネス湖で怪物と出会い、それを治めたと伝えられるのも聖コロンバである。『聖コロンバ伝』に語られるこれらの場所には、巡礼する人間の側に喚起される情緒やイメージなどの精神的あるいはスピリチュアルな体験が重ねられるからこそ、それらの場所は聖性を持った場所として認識され、持続的に巡礼され、聖地として社会的に構築される。コロンバ到着以降のアイオナ島の1450年間の歴史は、アイオナ島が聖地として社会的に構築され、破壊・荒廃を経て、さらに再発見されて聖地として再構築されるという連鎖ととらえられる。

アイオナ島において語られている聖コロンバの行為の中に聖なる実体をみて他の場所とは区別して考える方向が「実在論的アプローチ」である。「場所論的アプローチ」とは、このアイオナ島という島が固有に持っているさまざまな自然の特徴や地形の力が放つ雰囲気、人間の側に特別な効果や聖なる体験をもたらすという考え方である。アイオナ島においては、「場所論的アプローチ」の考え方は、この独特な場所にて聖なる実体が顕現したと考えられるので「実在論的アプローチ」と重なる。「構築主義的アプローチ」とは、アイオナ島の聖地性はここに集う人間によって社会的に構築されたという側面に注目する考え方である。この「構築主義的アプローチ」について、山中は「聖地の聖性が「聖なるもの」や「場所」といった人間の外側にあるものから一義的に引き出されるのではなく、場所に対する人間の側の語りや所作、あるいは聖職者や教団などの社会組織によって作られたということ」（中山，2012：7）と解説する。「構築主義的アプローチ」の見方では、アイオナ島を拠点に初期キリスト教共同体を創設した聖コロンバとその弟子たち、中世のベネディクト派修道院とオーガスティン派尼僧院、20世紀の超宗派（エキュメニカル）のアイオナ・コミュニティ、そしてどの時代においても来訪した巡礼者などの個人や社会集団がアクターとしてそれぞれの時代のアイオナ島を社会的に聖地として構築してきた。

一方、聖地巡礼の場では、長い移動を経てようやく目的の聖地に到達するという聖地巡礼の

プロセスを考えると、聖地では真正な経験が求められてきた。聖地における真正さのひとつには、スピリチュアルな経験がある。木村勝彦は、スピリチュアル・ツーリズムについて「宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題」(木村, 2012: 262)において、シンとシンの論を紹介しながら、スピリチュアル・ツーリズムをスピリチュアルな体験とツーリズムの体験とを広範囲に交錯させた現代人の自己実現の一つとして積極的に評価する。シンらによるとスピリチュアル・ツーリズムが個人にもたらす効果は3つ挙げられる: ①身をさらす exposure、②レジャー leisure の効果、③再生 recreation である。その特徴としては、感覚性、感感性、持続可能性がある。感覚性とは知的なものであり、感感性とは直観的に捉えられる感性的刺激であり、持続可能性とは「生命体と非生命体、内的なものとの外的なもの、人間的なものとの神的なもの」が一つになって相互に影響し、交流し合っているという意識をもつようになることであり、これらの要素が総合されたかたちで体験される。

近年、現代社会では、宗教の私事化が論じられる(島藺, 2012; 伊藤他, 2004; 岡本, 2012)。その特徴のひとつに、ある特定の宗教や教団には帰依しないが、自然の偉大さを体験するような、ある種のスピリチュアルな個人的な経験を大切にしている層が増えている。アイオナ島にある、修道院の建物の美しさや島のランドマークとしてたつケルト十字の彫像の芸術的な雰囲気、北方の海洋性気候に育まれた動植物の固有な自然環境、緑豊かな放牧地と、家々と修道院の遺跡を利用してつくられた庭園に囲まれた静謐な雰囲気やスピリチュアルな癒しの場所のイメージなどに惹かれる幅広い層のツーリストも来訪している(2011・2012年に筆者が行ったインタビューによる)。かれらの経験は、シンらが議論するスピリチュアル・ツーリズムの3つの効果と重なる。アイオナ島の自然と歴史が積み重なった聖地性に①身をさらし、楽しみ(②レジャーの効果)、癒されて③再生する経験の連鎖であると考えられる。

聖地巡礼ツーリズムにおいては、聖地はガイドブックで聖地性が格付けされ、消費の対象となることもある。Nick Mayhew Smith は、*Britain's Holiest Places: the All-new Guide to 500 Sacred Sites* (2011)において英国の聖地を500カ所とりあげて、それらの聖地を点数化してツーリズムの対象として格付けしている。最高スコアは10もしくは11である。アイオナ修道院は、10.5を獲得している。英国国教会の総本山のカンタベリー大聖堂は11なので、アイオナ修道院の10.5の聖地性の点数は非常に高く評価されている。

IV. 近代の紀行文・ガイドブックに記されるアイオナの呼称をめぐって：近代ツーリズムによるアイオナとケルトの再発見

『聖コロンバ伝』の現代英語訳を行ったりチャード・シャープ Richard Sharpe (1995) は、かれの行った現代英語訳では、一貫してこの島をアイオナ島と記しているが、かれは島の呼称について詳細な注を記している(Sharp, 1995: 257-259)。Sharpe も紹介するように、アイオナ島 Iona の呼称の初出は、7世紀末の9代目アイオナ修道院長アダムナーン(Adomnan, 627/8-704)

が著述した『聖コロンバ伝』に記された *Ioua Insula* である。その後、Iona の呼称は、14世紀以降の中世修道院関係の文書の手稿にもあらわれるが、それはアダムナーンの *Ioua Insula* の呼称に端を発するものであり、*Ioua* を *Iona* と読んだと Sharpe は解釈している (Sharp, 1995: 257-259)。

1914年に Peter MacNair によって著された *Cambridge County Geographies*. シリーズの地誌 *Argyllshire and Buteshire*. は、アイオナ島とアダムナーンの呼称について次のように述べる：

In 563 Columba and his disciples founded the monastery on the island afterwards known as Icolmkill, that is, “island of Columba of the church. The modern name Iona is a mistake for Ioua, an adjective form used by Adamnan. (MacNair, 1914: 77)

9世紀頃からおよそ千年にわたってこの島は聖コロンバ（聖コロンバはラテン語名である）のアイランド語名の「コロム・キルの島ーイ・コロムキレ I Coluimb Chille（つづりはいろいろあり統一されてはいないが）」と呼ばれるのが一般的であった。ところが、18-19世紀になると、*Iona* の呼称が徐々に復活する。『スコットランドのケルト語地名 *The Celtic Place-names of Scotland*.』を1926年に著した Watson や『聖コロンバ伝』の現代語訳の注釈を記す Sharpe は、本稿でも冒頭に記したジョンソン博士の有名な賛辞が、*Iona* の呼称の復活の契機になったのではないかと指摘する。

Iona の名称の意味や由来についての想像力は多くの人びとを刺激しており、その説は、さまざまである。Sharpe によると、どれも決め手につけ、確実な説ではなく「答えが適切に得られたことは今までにない」という (Sharpe, 1995)。以下、その *Iona* の由来についてのいくつかの説を紹介する。

1) 鳩の島

Watson による *The Celtic Place-names of Scotland* によると、聖コロンバの名前は、ヘブライ語で *Iona* (Jonah) であり、聖コロンバの島という意味でアダムナーンは *Ioua Insula* と記載したのではないかと指摘する。ヘブライ語で *Iona* (Jonah) は、鳩 *dove* の意味もあり、聖コロンバのシンボルとなっている。

サミュエル・ジョンソンがアイオナ島を訪れた前年の1772年にアイオナ島を訪れて詳細な記録を紀行文に記したペナント Pennant も、アイオナはヘブライ語の *jona* つまり、鳩 ‘*dove*’ と同じと考えていた。ペナントは、紀行文にアイオナ島の名前を語るときに *Jona* と綴っている。しかしながら19世紀のガイドブックの *The Native Steam-boat Companion* (1845) の作者は、ペナントがアイオナ島の名前を *Jona* に由来すると考えているのは、ある種のジョークだと語っている。

この説は、たわいもない想像力に富むと評されるが、Iona の名前の説としては、非常に人気があるとシャープは評価する (Sharpe, 1995)。

2) 聖ヨハネの島

シャープは、土着のゲール語の説として *I Eoin* (‘St John’s Island’ 「聖ヨハネの島」との意味) がアイオナへと変化したという説を紹介する。これは、John Walker が、1764年にヘブリディーズ諸島について記した記録に初出するという。その後、アイルランド人の観光客によって広められたのではないかと推察する (Sharpe, 1995: 258)。

3) 偽ゲール語の説の例：波の島

Revd Dugal Campbell は、1792年に、修道士の説として Iona はゲール語で ‘I-thonn’ (‘ee honn’ と発音する) となると紹介する。これは ‘island of waves’ (波の島) を意味する。しかし Campbell が認めているようにこれはゲール語ではない。修道士の使用する言葉はラテン語であるが、ラテン語ではこのような意味はない。このことから、この説は怪しいとシャープは述べる (Sharpe, 1995)。ジュール・ヴェルヌの『緑の光線』(1882) ではアイオナ島について「昔は波の島と呼ばれ」(ヴェルヌ, 2014: 163) たとこの説を紹介している。

4) 祝福された島・至福の島

I shona ‘blessed island’

ゲール語で *Sona* とは、恵まれた、幸せな ‘fortunate, happy’ という意味があり、*I shona* が、一緒になるとアイオナ ‘ee honna’ に近くなるという説である。この説は、1850年以前にはみられない。同時期のガイドなどに見られる説明ではないかとシャープは考える (Sharpe, 1995)。

盛節子は、『スコットランド文化事典』(2006)において、簡潔に次のように説明する。18-19世紀には、アイルランド語の「イ・ソナ *I sona*」=「至福の島」などの意味付けがされ、アイオナ Iona の名前が復活する (盛, 2006: 53)。

この説をとるのは、1891年に刊行された Elizabeth McHardy によるガイドブック *Iona* である。McHardy は「祝福された島」説をとり次のように説明する：

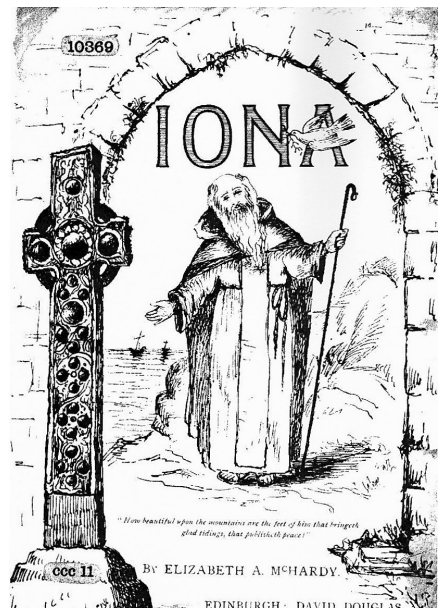


図8 アイオナ島のガイドブック Elizabeth A. McHardy (1891) *Iona*. David Douglas, Edinburgh. の表紙 (出典：British Library, Historical Print Editions より)

I, Hy, li-Cholum-Chille, Hymba, Inchcolm-Kill “The Isle of the Cell of Columba”, are a few of the many names by which Iona has been known *I* is the Celtic for “an island,” and *shona* (pronounced *ona*), “blessed” which, united, gives Iona, “The Blessed Isle.” (McHardy, 1891: 9)

5) フィオナ・マクラウドによる説：聖者の島

フィオナ・マクラウドの筆名で、ケルトの民話を語り、ウィリアム・シャープの名でケルト文化復興について熱く評論した19世紀後半に活躍した文筆家にとってアイオナは特別な場所であった。フィオナ・マクラウドの作品には、アイオナがケルトの源泉のような理想郷として夢のように語られる。荒俣宏による解説「北方の昏い星：フィオナ・マクラウドとスコットランドのケルト民族について」(1991)では、マクラウドはアイオナ島について「聖者の島」というユニークな説を語る：

Iona という名の由来は、イ・エイオン (I-Eion、ヨハネの島) と、イオウア (Ioua、ピクト人が命名した島名) の変形ともいわれます。しかしマクラウドは、この島に住む聖職者や聖人を今でも「ドルイド」と呼ぶことから、イオナにはもっと神聖な由来があるはずだと考えました。ゲール語で「聖人ドルイド」のことを *shona* といいます。ゲール語の場合、語の先頭に出てくる *sh* は無声音になりますから、島を示す *I* を付して *I-Shona* (イ・オーナ、聖者の島) が真の語源であったと主張しました。こうしてマクラウドは、「夢の都市イオナ」を名称の由来の段階から神聖化していったのです」(荒俣, 1991: 218-241)

有元志保は、同一人物であるウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯をみすえて、かれを男と女を生きた作家として「存在しえないものへの思慕」を生涯追求したと評論する(有元, 2012)。マクラウドにとってのアイオナは、単なる物語の舞台を越えたところにあった。マクラウドの物語は、「もうひとつのアイオナ」、「心のアイオナ」、つまりそうであってほしい理想がアイオナという呼称をとった。アイオナはかれが主導する「ケルティック・ルネッサンス」というケルト民族の自主独立運動で目指す理想郷の役割をも果たしていた(荒俣, 1991: 218-241)。マクラウドは、アイオナという呼称を探求することを通じてケルトを再発見した。

V. おわりに

アイオナのキリスト教の聖地性には、3つのピークがあった。聖コロンバの到着からなる初期キリスト教の時代、中世のベネディクト派修道院・オーガスティン派尼僧院時代、20世紀の

アイオナ・コミュニティの時代の3つである。

第1の時代の主人公、コロンバの業績についてトマス・カヒルは『聖者と学僧の島：文明の灯を守ったアイルランド』において、次のように述べる。かれは「(コロンバは) まれにみる決断力で、スコットランド人とピクト人のあいだに、文字の読める、キリスト教の社会をこしらえあげた」(カヒル, 1997: 269) と評価する。さらにコロンバの意志を受け継いだアイオナ修道院出身のエイダンはイングランドのノーサンブリアの異教徒アングル人の間に布教し、リンディスファーン修道院というブリタニアにおける北からのキリスト教の中心地を築く。アイオナ修道院の撒いた種である。この時代は、アイオナ島はアイルランドからブリテン島へともたらされたキリスト教社会の活発な交流の中心地であった。しかしながら、南からのルートでブリテン島にもたらされたローマン・カトリックのキリスト教社会の序列の中では、アイオナ島は北方の辺境の地となった。アイオナ島キリスト教の第2のピークである中世のローマン・カトリックのベネディクト派修道院・オーガスティン派尼僧院時代は、アイオナ島は周縁の聖地となった。

さらに、第2と第3のピークの間、修道院・尼僧院の廃墟の時代には、廃墟を愛でるピクチャレスク・ツーリストが訪れ紀行文を記し、文学作品の舞台となった。その時代には、芸術家のピクチャレスクと科学の目によってアイオナはとらえられた。ペナント、ジョンソン、ボスウェル、ウェルズと次々と文人が訪れアイオナ島の遺跡が記された。とくにウェルズは、科学と芸術のあいだの体験について『緑の光線』で論じた。アイオナ島の遺跡は計測され、岩石は科学的に調べられる。でも、幸せの緑の光線を見るためには科学的な計測だけでは不十分であることをヒロインの経験を通して示唆した。

フィオナ・マクラウド (ウィリアム・シャープ) は、心の中で理想化された夢の都市としてのアイオナを描いた。作家・評論家マクラウドにとってのアイオナ島はケルト文化復興のシンボルとなった。

1938年以降、司祭ジョージ・マクラウド率いるアイオナ・コミュニティの中世のベネディクト派修道院の修復作業において、アーツアンドクラフトの技術が花開いた。修道院の回廊の列柱にはグラスゴー芸術の潮流をひくクラフトマンシップ (職人) の芸術を現在も目にすることができる (Mathers, 2001)。アイオナ島で巡礼者に売る土産物店としてのルーツを持つリッチー家が、ケルトのモチーフを洗練させた彫金芸術を発展させた (MacArthur, 2003)。

アイオナ島の現在の文化遺産管理についてみると、近代における2つの象徴的な文化的景観の創造の身ぶりがみられる。生きた礼拝堂として使用されるアイオナ修道院と、廃墟として庭園化されるオーガスティン派尼僧院。現在のアイオナ島の歴史文化遺産の管理は、アイオナ・コミュニティとヒストリック・スコットランドが連携して行っている。

最後に巡礼ツーリストたちのアイオナ島の滞在時間について考察する。アイオナ島は、現代においてもスコットランドの辺境の地であり、グラスゴーから公共交通機関を使うと列車、フェ

リー、バス、フェリーを乗り継いで1日かかりで到着するような場所である。スコットランド本土の西端の拠点オーバンから出発するマル島、アイオナ島、スタファ島を訪れる1日かかりの島めぐりツアーに参加するとアイオナ島に上陸するのは長くて2時間程度である。船着き場に上陸して、徒歩でオーガスティン派尼僧院の廃墟やケルト十字架の標柱とアイオナ修道院などを巡るには2時間あれば十分な小さな島である。巡礼ツーリストの多くは日帰りでアイオナ島を訪問している。しかしながらアイオナ島に宿泊すると、あまりツーリストのいない静寂な早朝の朝焼け、夕方の美しい夕日を一刻ごとに光とともに姿を変える海とともに眺めることができる。ツーリストの多い昼間のアイオナ島とは、別世界である。徒歩で3時間程度かけて島の南端 Columba's Bay や西端の海岸 Bay at the Back of the Ocean までウォーキングを楽しみ、島の中心部にあるアイオナ島最高峰の Dun I に登り、眼下にアイオナ修道院を眺め、遠くヘブリディーズ諸島を望むことができる。巡礼ツーリストたちは、夜には、アイオナ修道院で行われるアイオナ・コミュニティの集会や礼拝にも参加することができる。このように滞在時間によって巡礼ツーリストのアイオナ島での経験の質は異なる。

本稿ではアイオナ島の近代以降のツーリズムを論じるにあたって旅行ガイドブックには触れることができたが、現代のアイオナ島の紀行文・滞在記に言及することはできなかったのも、今後の課題としたい。とくに興味のかかれる滞在記としてアメリカで活躍している都市計画家・庭園デザイナーの Clare Cooper Marcus による *Iona Dreaming: the Healing Power of Place A Memoir* (2010) があげられる。Marcus は、大病を患いその回復期に6ヶ月アイオナに滞在した経験についてアイオナをタイトルに掲げる自叙伝に語っている。彼女は病院やホスピス・療養所などの中にオープンスペースや庭園をデザインしており、コミュニティにおける公共庭園などの場所が人びとにとって精神的に健全な生活を営む上で重要であることについて研究・実践することをライフワークとしている (Marcus and Sachs, 2014)。Marcus にとっては、アイオナ島じたいが、大病からの回復と復帰をもたらしてくれるような癒しの庭園であった。この滞在記を含む現代のアイオナ島についての紀行文の分析については今後の課題とする。

参考文献

- Adomnan of Iona. (translated by Sharpe, Richard) (1995) *Life of St Columba*. Penguin Classics. London.
- Atherton, Mark Eds. (2002) *Celts and Christians: New Approaches to the Religious Traditions of Britain and Ireland*. University of Wales Press. Cardiff.
- Bellesheim, Alphons. (1887) *St. Columba and Iona: the Early History of the Christian Church in Scotland*. Eremitical Press.
- Bray, Elizabeth. (1986) *The Discovery of the Hebrides: Voyages to the Western Isles 1745-1883*. Collins. Glasgow.
- Byrom, Bernard. (2007) *Old Iona and Staffa*. Stenlake Publishing. Catrine.
- Caddy, Peter. (1996) *In Perfect Timing: Memoirs of a Man for the New Millennium*. Findhorn Press.
- Christian, Jessica and Stiller, Charles. (2000) *Iona Portrayed: the Island through Artists' Eyes, 1760-1960*. The New Iona Press. Iona.

- Ferguson, Ronald. (1990) *George MacLeod: Founder of the Iona Community*. Collins. London.
- Ferguson, Ronald. (1998) *Chasing the Wild Goose: the Story of the Iona Community*. Wild Goose Publications. Glasgow.
- Galloway, Kathy. (2010) *Living by the Rule: The Rule of the Iona Community*. Wild Goose Publications. Glasgow.
- Grenier, Katherine Haldane. (2005) *Tourism and Identity in Scotland, 1770-1914 Creating Caledonia*. Ashgate.
- MacArthur, Mairi. Eds. (1991) *Iona: through Travellers' Eyes*. The New Iona Press. Iona.
- MacArthur, E. Mairi. (2003) *Iona Celtic Art: the work of Alexander and Euphemia Ritchie*. The New Iona Press. Iona.
- MacArthur, E. Mairi. (Revised edition 2007, first 1995) *Columba's Island: Iona from Past to Present*. Edinburgh University Press. Edinburgh.
- MacArthur, E. Mairi (1990) *Iona: the Living Memory of a Crofting Community 1750-1914*. Edinburgh University Press. Edinburgh.
- Maclean, Lachlan. (1845) *The Native Steam-boat Companion*. Quentin Dalrymple. Edinburgh.
- MacLeod, Fiona. (1991, first 1910) *Iona*. Floris Classics. Edinburgh.
- MacNab, Peter. (2007) *Mull and Iona: Highways and Byways*. Luath Press. Edinburgh.
- MacNair, Peter. (1914) *Argyllshire and Buteshire. (Cambridge County Geographies.)* Cambridge University Press. Cambridge.
- Marcus, Clare Cooper. (2010) *Iona Dreaming: the Healing Power of Place A Memoir*. Nicolas Hays, Inc. Lake Worth.
- Marcus, Clare Cooper and Sachs, Naomi A. (2014) *Therapeutic Landscapes: An Evidence-Based Approach to Designing Healing Gardens and Restorative Outdoor Spaces*. Wiley. New Jersey.
- Marshall, Rosalind K. (2014) *Columba's Iona: A New History*. Sandstone Press. Dingwall.
- Mathers, Ewan. (2001) *The Cloisters of Iona Abbey*. Wild Goose Publications. Glasgow.
- Maxwell, W. (1857) *Iona and the Ionians: their manners, customs and traditions, with a few remarks on Mull, Staffa and Tyree*. Thomas Murray and son. Glasgow. (Kessinger Publishing's Legacy Reprints.)
- McHardy, Elizabeth A. (1891) *Iona*. David Douglas. Edinburgh. (British Library, Historical Print Editions.)
- Millar, Jean M. (2006(third edition), 1972(first published), 1993(second edition)) *Flowers of Iona*. The New Iona Press. Iona.
- Monteith, W. Graham. (2000) 'Iona and Healing: A Discourse Analysis' (p.105-117), Sutcliffe, Steven and Bowman, Marion (2000) *Beyond New Age: Exploring Alternative Spirituality*. Edinburgh University Press. Edinburgh.
- Morton, T. Ralph. (1977) *The Iona Community: Personal Impressions of the Early Years*. The Saint Andrew Press. Edinburgh.
- Muir, Anne. (2011) *Outside the Safe Place: an oral history of the early years of the Iona Community*. Wild Goose Publications. Iona.
- Murray, Ellen. (1959 fourth edition) *Peace and Adventure: the story of Iona for young folk of all ages*. The Iona Community. Iona.
- Nahmad, Claire. (2014) *Pilgrimage to Iona: Discovering the Ancient Secrets of the Sacred Isle*. Watkins Publishing. Oxford.
- Polhill, Chris. (2006) *A Pilgrim's Guide to Iona Abbey*. Wild Goose Publications. Glasgow.
- Power, Rosemary. (2010) *The Celtic Quest: A Contemporary Spirituality*. The Columba Press. Dublin.
- Power, Rosemary. (2013) *The Story of Iona*. Canterbury Press. Norwich.

- Ritchie, Anna and Fisher, Ian (2011(revised edition), 2001(first published)) *Iona Abbey and Nunnery: the Official Souvenir Guide*. Historic Scotland.
- Shanks, Norman. (1999) *Iona God's Energy: the Spirituality and Vision of the Iona Community*. Hodder & Stoughton. London.
- Sharpe, Richard. (1995) Introduction and Notes in Adomnan of Iona. (translated by Sharpe, Richard) (1995) *Life of St Columba*. Penguin Classics. London.
- Singh, Shalini and Singh, Tej Vir. (2009) 'Aesthetic Pleasures: Contemplating Spiritual Tourism' (p.135-153) Tribe John (eds.) (2009) *Philosophical Issues in Tourism*. Channel View Publications. Bristol.
- Smith, Nick Mayhew (2011) *Britain's Holiest Places: the All-new Guide to 500 Sacred Sites*. Lifestyle Press. Bristol.
- Stewart, John. (1886) *Wilson's Official Guide to the islands of Staffa and Iona*. David A. Wilson. Glasgow and London. (British Library, Historical Print Editions.)
- Watson, W.J. (Introduction by Taylor, Simon) (2004, first edition was 1926) *The Celtic Place-names of Scotland*. Birlinn. Edinburgh.
- Webster, Paul and Webster, Helen. (2012) *Mull and Iona: 40 Favourite Walks*. Pcket Mountains Ltd. Dumfries and Galloway.
- (2010) *The Lonely Gannet's Pocket Guide to Iona. Second Edition*.
- (2012) *The Lonely Gannet's Pocket Guide to Iona. Third Edition*.
- 荒俣宏 (1991) 「北方の昏い星：フィオナ・マクラウドとスコットランドのケルト民族について」、マクラウド、フィオナ (荒俣宏訳, 1991) 『ケルト民話集』ちくま文庫 (p.218-241)
- 有元志保 (2012) 『男と女を生きた作家：ウィリアム・シャープとフィオナ・マクラウドの作品と生涯』国書刊行会
- 伊藤雅之・樫尾直樹・弓山達也編 (2004) 『スピリチュアリティの社会学：現代世界の宗教性の探求』世界思想社
- ヴェルヌ, ジュール (中村三郎訳) (2014, 原著は1882) 『緑の光線』交遊社
- ヴェルヌ, ジュール (中村三郎訳) (1979, 原著は1882) 「緑の光線」、ヴェルヌ, ジュール (大久保和郎・中村三郎訳) (1979) 『海と空の大ロマン・北海の越冬・緑の光線』パシフィカ
- 岡本亮輔 (2012) 『聖地と祈りの宗教社会学：巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社
- カヒル, トマス (1997) 『聖者と学僧の島：文明の灯を守ったアイルランド』青土社
- 木村勝彦 (2012) 「宗教ツーリズムにおける真正性と倫理の問題」、山中弘 (2012) 『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』世界思想社
- 近藤和彦編 (2010) 『イギリス史研究入門』山川出版社
- 島蘭進 (2012) 『現代宗教とスピリチュアリティ』弘文堂
- シムズ, ジョージ・オト (雨宮照美訳, 2008) 『ケルズの書を読み解く』O'Brien Press. Dublin.
- ジョンソン, サミュエル (諏訪部仁・市川泰男・江藤秀一・柴垣茂訳, 2006) 『スコットランド西方諸島の旅』中央大学出版部
- ディヴァイン, T.M. (2007) 「ハイランド・クリアランス」、ディグビー, A.・ファインスティーン, C. 編 (松村高夫ほか訳) (2007) 『社会史と経済史：英国史の軌跡と新方位』北海道大学出版会
- 星野英紀・山中弘・岡本亮輔編 (2012) 『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂
- ボズウェル, ジェイムズ (諏訪部仁・市川泰男・江藤秀一・柴垣茂・稲村善二・福島治訳, 2010) 『ヘブリディーズ諸島旅日記』中央大学出版部
- マクラウド, フィオナ (荒俣宏訳, 1991) 『ケルト民話集』ちくま文庫
- マクラウド, フィオナ (松村みね子訳, 2005) 『かなしき女王：ケルト幻想作品集』ちくま文庫

スコットランド西部アイオナ島の歴史と巡礼ツーリズムの素描

- 盛節子 (2006) 「アイオナ島」(p.52)、「アイオナ修道院」(p.394-396)、「コロンバ／コロムキル」(p.392-393)、
木村正俊・中尾正史編 (2006) 『スコットランド文化事典』原書房
- 盛節子 (1991) 『アイルランドの宗教と文化：キリスト教受容の歴史』日本基督教団出版局
- 森正人 (2012) 『英国風景の変貌：恐怖の森から美の風景へ』里文出版
- 山中弘 (2012) 『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』世界思想社